

大阪市立近代美術館(仮称)建設準備室 蔵

大阪がリードした 洋服文化

モダン都市の象徴であった洋装は、繊維産業の街大阪にあっては単なる実用品の域を超え、ファッションデザインとして人々にもっとも身近な芸術作品として発展してきた。1960年代にはパリの最先端のモードがほぼ同時に大阪にも紹介されるなど、その土壌はやがて世界的に活躍する多くのデザイナーを生み出していった。

都市を構成する要素として建築や道路、川など自然または人為的な空間を構成する要素と並んで、そこに暮らす人々の文化的な要素が重要であることは言うまでもない。その文化を担う人に、文字通り最も身近な芸術がファッションであることも明らかであろう。都市であり続けた大阪は、建築や広告といった街の芸術分野において多くの名作とパイオニアを生み出してきたように、ファッションにおいても先駆的役割を果たしてきた。

ここでのファッションは和装着物ではない。モダン都市として疾走する近代の大阪にとっては、洋装こそが街の芸術のシンボリックな存在であったのだ。昭和のはじめ頃、大阪の近代都市としてのインフラが整うのにもなつて洋服姿の女性は飛躍的に増えたという。そんな中で、小磯良平のような画家たちも、洋服づくりの現場をモダンで華やかなものとして作品の中に登場させている。

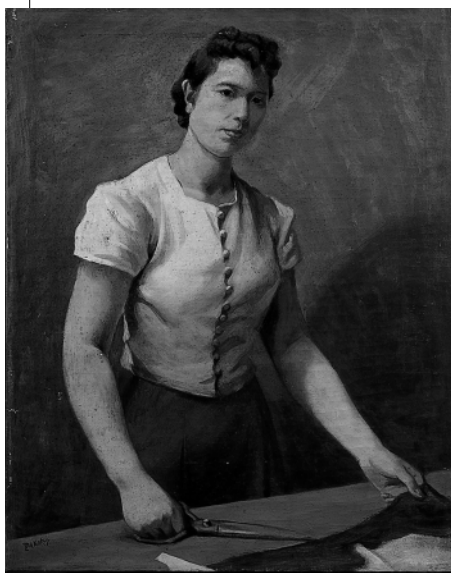
また船場を引き合いに出すまでもなく、大阪は繊維産業の街であり、質量ともに日本のファッションデザインを含む洋服文化の中心地として、近代から現代に至るまで機能してきたのであった。その洋服文化、服飾芸術が本格的に花開くのは第二次大戦後のことである。それには上田安子のようなパイオニアを必要とした。彼女は戦後すぐに大丸心齋橋店の顧問デザイナーに

小磯良平(1903-1988)
[コスチューム]昭和14年(1939)
油彩・カンヴァス

この作品は大阪の洋裁店の様子を描いたというわけではないが、すでに日中戦争がはじまっていた昭和14年に描かれた作品ながら神戸生まれの小磯らしいモダンな雰囲気や漂わせている。「洋裁もの」は当時小磯のもっとも得意とするモチーフのひとつであった。ここでは実際に着ている少女はひとりであるが、鏡に映ったものも含めてまばゆいばかりの白いドレスが何体も並び、当時の洋裁学校を思わせる華やかな感じをつくり出している。

鈴木誠(1897-1969)
[裁断師]昭和21年(1946) 油彩・カンヴァス

鈴木は大阪に生まれ旧制八尾中学を卒業後、東京美術学校に学ぶ。小磯良平より6歳年上の先輩にあたり、新制作派協会と一緒に創設した仲間でもあった。この作品の裁断師は髪型や服装こそ先進的な雰囲気であるが、真剣なまなざしやがっしりした肩や腕からは働く女性の堅実さが伝わってくる。洋裁が女性の仕事として定着していく時代の雰囲気や、着実な筆致でリアルに描いた鈴木誠の特徴がよくあらわれた作品と言える。



大阪市立近代美術館(仮称)建設準備室 蔵



上田安子の洋服への興味は好きな山登りがきっかけであった。昭和のはじめ、山登りをする女性は少なく、彼女らのための服など選択の余地がない時代、自ら工夫してつくることから始まった。



上田安子服飾専門学校が発行するファッション雑誌。55年、575号の歴史を持ち、ファッションに関する記事や最新モードについてのニュースだけではなく、型紙の付録もついた実用的な雑誌として新しいデザインを広く伝える啓蒙的役割も果たしてきた。

上田安子直筆によるデザイン画。1965年に発表されたコレクションのため描かれたもので、細部の指示が書き込まれている。



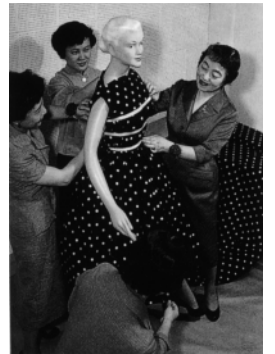
上田安子関係資料提供：上田安子服飾専門学校



上田安子の新しい洋服づくりのための教育活動は自らの学校だけに閉じこもることなく、放送局と組んだイベントなど多様な場で精力的に行われた。



1950年代、上田は本場パリの代表的なデザイナーであったクリスチャン・ディオールを通してオートクチュールというファッションデザインの真髄に触れることになった。右から二人目がディオール。



上田は1996年に亡くなるまで新しいデザインの服制作に情熱を注いだ。



就任し、一九五〇年代にはパリ・オートクチュールの中心デザイナーであったクリスチャン・ディオールのデザインを紹介することで大阪(または日本)のファッションデザインの質を一挙に高めるのに貢献した。またデザイナーとしてだけではなく、自らが創設した服飾研究所(現・上田安子服飾専門学校)や数多くの講演会を通して、デザイナー教育にも力を注いだ。

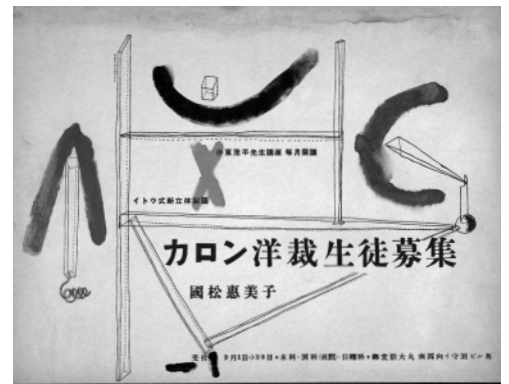
六〇年代以降、大阪ではフランスのファッションデザイナーたちのシヨウが頻繁に開催され、巨匠たちのデザインに直接触れる機会が増えていった。さらに一九八七年になると第一回の大坂コレクションが開催され、世界的に活躍する新人デザイナーたちが次々とデビューしていった。

上田安子「cocktaildress」1988

第二次大戦後、人々の洋装化が進む一方、それを習うための学校が数多く設立された。大阪も例外ではなく、これは心齋橋の大丸向かいに入ったあたりにあった有名洋裁学校のためポスターである。



デザイン：早川良雄



デザイン：早川良雄



1960年代には、大丸にもディオールなどの販売コーナーがつくられたり、有力顧客を対象にした受注のための小規模なファッションショーが頻繁に開かれていた。

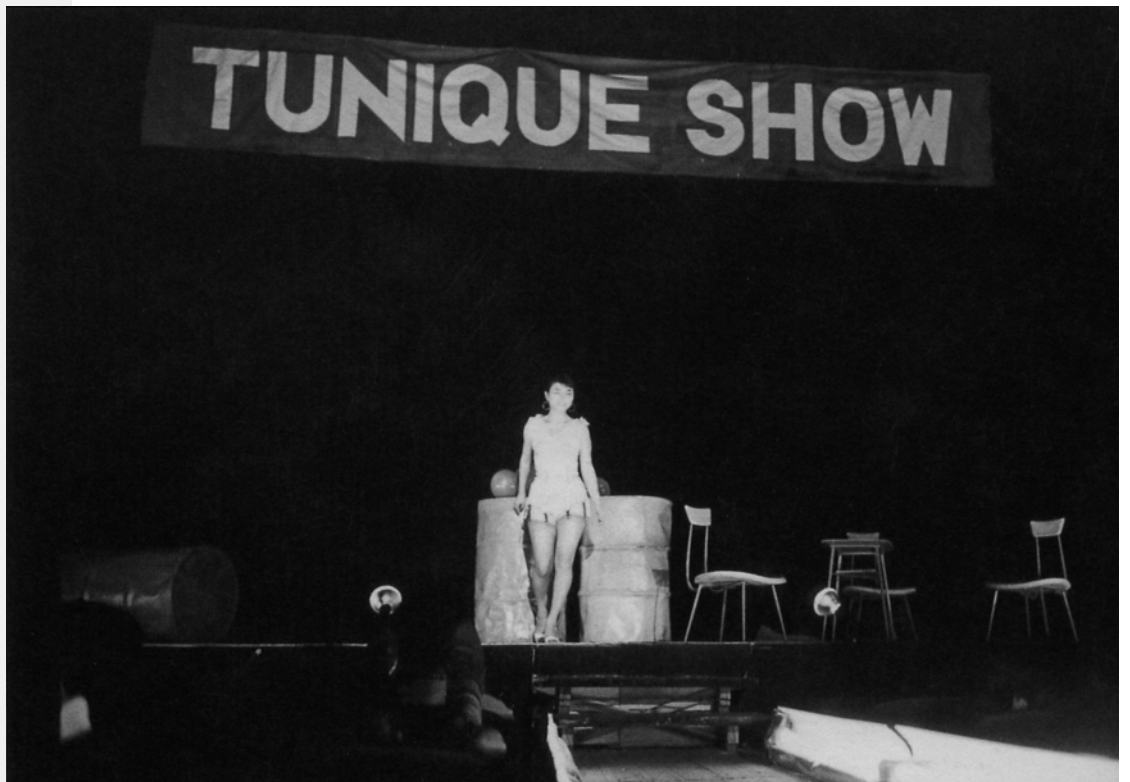
資料提供：上田安子服飾専門学校



戦後すぐの1948年、関西女流芸術家協会の展覧会が大丸心齋橋店で開かれ、その際、屋上で行われたファッションショーには上田安子が参加している。



1963年、フェスティバルホールでピエール・カルダンの大規模なショーが開かれた。世界的なデザイナーのつくるデザインに直接触れる機会であった。舞台の装置および演出はグラフィックデザイナーの早川良雄が担当した。



1955年に行われた鴨居羊子の下着デザインのショー。鴨居の功績は、それまで人の目から隠す存在であった下着をファッションの重要な要素のひとつとして人々に認知させたことであった。



1987年、大阪のファッションデザインを世界に発信する場として大阪コレクションがはじまった。上はコレクション創設の発表記者会見の様子。サントリーの佐治敬三やデザイナーのコンノヒロコの姿が見える。左は第1回大阪コレクションでのコンノのショーのフィナーレの様子。

1991年の第5回大阪コレクションから新人のためのステージが設けられ、以後この場から世界的に活躍することになるデザイナーたちが巣立っていった。



1989年の第3回大阪コレクションでは韓国のデザイナーたちが参加した。その後も韓国や中国などアジアのデザイナーが参加し、アジアでの代表的なコレクションに育つことが期待された。